

館長 Q&A 『榎さんに聞いてみよう！』 1

2015年から2016年の「熊谷守一美術館だより」に、熊谷守一の二女で当館館長の熊谷榎が、来館者からいただいた質問に答えるという連載がありました。これは2017年に、その連載を加筆修正してまとめたものです。

Q1. 熊谷守一さんが暮らした家や庭は残っていないのですか？

A. 庭はありません。美術館の前のケヤキが、庭から残した最後の木です。いつでも父(モリ)の絵を見てもらいたいと思って1985年に、この美術館を建てました。もう32年になります。ここの敷地は、はじめ80坪くらいあると思っていたけれど、実際そんなにないのね。私たちが引っ越してきた当時(1930年)は、辺り一面畑で、家が30坪、南側の庭が50坪足らずでした。最近、豊島区の土木課に聞いたら、1937年頃に南側の道幅を1.5m広げる区画整備があったらしくて、それでちょっと庭が狭くなったのでしょう。戦後、東側に家も増築したので、最晩年のモリの庭は40坪ありませんでした。狭い庭だったけれど、80歳頃から遠くに出かけられなくなったモリは、1日のほとんどを庭で過ごしていました。

Q2. 熊谷守一さんは、生涯で、どのくらい作品を描かれているのでしょうか？

A. 油絵は、2004年に求龍堂の〈熊谷守一油彩画全作品集〉が出てからも、載っていない絵が見つかったのでおおよそ1200点くらいでしょうか。墨絵と書の数、わかりません。頼まれたその場で書いて渡していたので…それぞれ3000点くらいでしょうか。

Q3. 熊谷守一美術館で収蔵している油絵はどのくらいあるのですか？

A. 当館で収蔵している油絵は約30点です。アトリエに残されていた作品と、ご厚意で寄贈して頂いた作品や、私が購入した作品もあります。あと、兄が持っていた作品を今も寄託で飾らせてもらっています。第1展示室には個人の方からお借りしている作品と併せて30点程の油絵を常設しています。2階の第2展示室には、墨絵・書・クレパス画・鉛筆画など130点ほどの収蔵作品の中から25点程を展示しています。

Q4. 熊谷守一美術館は展示替えをしますか？

A. 油絵の展示替えは行っていません。修復や貸し出し等の理由で一部、展示が替わることはあります。第2展示室の墨絵と書は、季節によって若干の展示替えをしています。特別企画展の時は、いつもより多くご覧いただけます。

Q5. 「陽の死んだ日」「ヤキバナカエリ」「雨滴」は、どこの所蔵ですか？どうしたら観られますか？

A. 「陽の死んだ日」(1928年)は倉敷の大原美術館、「ヤキバナカエリ」(1948-55年)は岐阜県美術館、「雨滴」(1961年)は愛知県美術館(木村定三コレクション)が収蔵しています。人気のある三毛猫を描いた作品も愛知県美術館(木村定三コレクション)にあります。公開の時期などは、各美術館にお問い合わせいただくのが良いでしょう。

Q6. 他の美術館で熊谷守一作品を観ることは出来ますか？

A. 常設では、モリの故郷である岐阜県中津川市付知町の熊谷守一つけち記念館で観ることが出来ます。熊谷守一つけち記念館には約100点の油絵が収蔵されています。館長をされている小南佐年さんのコレクション(油絵90余点)を主軸に、旧熊谷守一記念館や中津川市蔵の作品と合わせて、いつでも60点程の油絵をご覧になれる美術館です。

Q7. 守一さんが晩年、板にばかり油絵を描いた理由をご存知ですか？また、小品が多いのはなぜですか？

A. 木の板の肌合いが好きだったのかしらね。モリは『写生旅行に持って行く絵具箱にちょうど4号の板が3~4枚入ったから』と言っていました。晩年、1950年頃からの油絵は、桂や桜の木の板に描いたものがほとんどです。しっくりきたんじゃないかしら。当館で見られる「縁側」(1949年/寄託作品)、「野天風呂」(1952年)、「上げ潮」(1956年/寄託作品)(※3点とも12号)など、モリにしては大きな作品は、キャンバスに描いています。それから日本橋浜町の表具屋さんに頼まれて、紙に油彩で描いた作品もあります。東京国立近代美術館蔵の「鬼百合に揚羽蝶」(1959年)もそうです。墨絵で、襖絵や大きな屏風も、知り合いから頼まれて描いたみたいだけど、それはずいぶん苦労したようです。

Q8. 守一さんはお酒を飲まれましたか？

A. まったく飲みませんでした。酒粕でも赤くなるほど。そのため、うちには酒文化というものがありませんでした。

→つづく

館長 Q&A 『 榧さんに聞いてみよう! 』 2

Q9. 若い頃、守一さんは絵が描けず貧しかったのですか？絵が売れたのはいつ頃からですか？

A. うちが最も貧しかったのは、子供たちが生まれて間もなかった頃で、二科の研究所で教え始めてからは、まだマシだったようです。1938年に名古屋の展覧会で出会った資産家の木村定三さん(1913-2003)がモリの絵に惚れ込んで、それからは、大変な後押しがありました。敗戦直後には湯沢三千男さんが、有名な方やお金持ちの人を次々とうちへ連れて来ては、絵を薦めてくれました。湯沢さんは学生だった頃に、モリの「蠟燭」(1909年／岐阜県美術館蔵)を一目で気に入って購入された方で、広島県知事の後、戦中は内務大臣をされていたとか。そういう方たちに顔が広がったのでしょね。1964年のパリ展のあとは、画廊さんの熱心な宣伝の効果もあって、急激に絵の値段が高くなりました。

Q10. 熊谷家には来客が絶えなかった、と何かで読みました。いつ頃からですか？

A. 私が小さい頃から、二科の研究生らはモリに絵を見せに来ていたけれど、1度モリに会ってみたいというような熱心なファンが全国から押しかけるようになったのは、私が1956年に結婚して家を出た後でしょうね。私が居た頃はそうでもなかったから。それからは、モリが亡くなるまでずっと、午前中はいつ行っても、炬燵のあった6畳間がお客でいっぱいでした。90歳くらいになると、昼食後は昼寝をする習慣になっていたので失礼して、それでも夕方になるとまた取材の人や、絵を頼みに来た画商やファンであふれ返っていました。その頃、うちには玄関がなかったのね。モリが縁側に座っていれば外から見えちゃうし、縁側のガラス戸と障子を開けていると炬燵に座っているモリが丸見えなので、みんな入ってきて居留守も使えませんでした。

Q11. 守一さんは、外国へ行かれたことがありましたか？

A. 藝大を出たての若い頃、漁業調査の仕事を受けて樺太へ行っていますが、絵の勉強では行っていません。故郷から再上京したモリの生活を援助してくれた斎藤豊作さんが、フランスへ一緒に行かないかと勧めた時には「好きな人がいるから行かない」と言って断ったとか。その後結婚した母のことです。パリの個展も、84歳と高齢だったので本人は行かず、私と母が行きました。

Q12. 榧さんは守一さんと旅行に行った事がありますか？

A. 戦後少し落ちついて、木村定三さんと猪飼正一さんを訪ねて、2・3度名古屋に連れて行ってもらいました。当時まだ食糧難でロクなものを食べていませんでしたから、向こうでもてなされる豪華な懐石料理を食べさせてやりたいと思ったみたい。あとは1950年頃、写生旅行に同行して、長野の蓼科山麓に1度と、千葉の太海の海岸に2度ほど連れて行ってもらったことがあります。

Q13. 守一さんは車を運転されたのでしょうか？

A. 運転はしませんでした。なんせ明治の生まれですから。モリの青年期はまったく車のない時代だし、自転車も、いつか帰省したときに乗ったという日記が残っていますが、おそらくそれっきりでしょう。

Q14. 守一さんは《仙人》のようでしたか？

A. いつも聞かれるけれど、《仙人》なんかじゃありませんでしたよ。ふつうです。金銭欲や所有欲のないことは並外れていて、人を押しのけるようなところのない人でしたけど。白いシャツは嫌いだし、カルサンを履いて、床屋も嫌いでした。そういうモリが気に入っていた格好(風貌)を揶揄されたのでしょね。ただ、「モリさんは仙人だから」とおだてられる時は、大抵相手に都合の良い話だと言っていました。

Q15. 著書《へたも絵のうち》とはどういう意味ですか？守一さんは、ご自分をへただと思っていたのでしょうか？

A. 《へたも絵のうち》という書籍は、日本経済新聞の連載で出たモリが話した言葉をまとめたものです(初版は1971年)。題名は日経の単行本の担当者が考えて来たらしいのね。モリにしてみたら、へたな絵のなかにも良い絵はあるし、世間で巧い(うまい)と言われて、もてはやされる絵にもくだらないのもあるってことで…。絵っていうのはそういう、いわゆる上手(うまい)とか下手(へた)とかじゃない、というようなことだから。そういうことをわかって、日経の担当者は書籍名らしくしたのでしょ。モリの絵がどうこうっていうんじゃないことぐらいわかると思うけど。わからない人は、きっと絵を見ても何してもわからないでしょから…それはそれでいいんじゃないかと思っています。